

◆昨年の三月に渋谷や原宿で行われた「令和の百姓一揆」は、トラクター三十台ほどを先頭に四千人超が参加して盛り上がったようだ。欧米並みの農家への所得補償の実現などを呼びかけたもので、実行委員会代表は菅野芳秀さん。菅野さんは山形県の農家で、「いま農村では『農終い』<sup>のうしま</sup>という言葉が交わされている。農家を守りながら消費者と連携し、食と農と命を大事にする日本に変えていかなければ」と語っている。十一月には、山形市でも「令和の百姓一揆」として市街地をデモ行進し、シンポジウムも行われた。今号には、山形の百姓一揆についての短信がある。ぜひ、お読みください。

◆生まれ育った町に引っ越してきて一年が過ぎた。地区の地藏尊の春祭りや秋祭りの案内が来るのだが、自分がよく遊んだ神社や寺のこと以外はほとんど知らないことに気がついた。そんなことをしゃべっていたら、郷土の歴史に詳しい先生がそこにいらっしやるではないか、みんなで話を聞こうと早速動いてくれた人がいる。先生は快諾してくださり、とんとん拍子に日程等が決まった。その企画を区長に伝えたところ、地区の行事にしてはどうかと言ってくれた。当日、何人集まるか、天気はどうか、クマ情報はこないかなど心配していたが、大丈夫だった。先生を先頭に歩きなが

ら、さまざまな説明を聞いた。みなさん顔見知りなので、先生にどんどん質問し、各自の思い出も話しながら楽しく歩いた。外側がみすばらしくなった荒神堂なのに、中に入ると四十八枚もの天井絵があつて驚いた。これまできちんと受け継がれてきたのだなあと改めて思った。地区の名の下工<sup>しもく</sup>は、下工藤小路<sup>しもくどうこうじ</sup>の略だった。初めて聞くことが多く、二時間の村社めぐりはとても有意義なものになった。先生が用意してくださった資料「下工藤小路散歩」を読み返している。

いま『ロック・キッチン』（川内有緒、講談社、二〇二五年十一月）を読んでいる。本の紹介によると、「みんな、なに食べて、どう生きてるんだろ？ 福島第一原発事故から14年、国道6号線（ロック）を旅し、温かくておいしい記憶を綴る。再生と希望に出会うノンフィクション」だ。これが面白い。ときどき、グツとくる。そして、深い。一方、ドキュメンタリー映画「ロック・キッチン」は、二月半ばよりポレポレ東中野を皮切りに全国で順次上映されるとのこと。この映画は、昨年十月に開催の「山形国際ドキュメンタリー映画祭2025」において上映され、大盛況だったらしい。が、当方はプログラムを手にしたもの、昨秋は「ドキュ山」に行かなかった。こんど全国上映の際は、ぜひ観たいと思っているところだ。

（布宮慈子）

[muninokai.com](http://muninokai.com)

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景  
120号

二〇二六年一月二十七日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

[info@muninokai.com](mailto:info@muninokai.com)